初期経典の一様態

――『スッタニパータ』アッタカヴァッガを中心に――

南　清　隆

問題の所在

近年内外を問わず、多くの気鋭の研究者たちによって、初期仏教文献の主に偈頌を中心とした章句と、他のインド思想、特にジャイナ教聖典類との類似平行句の対照作業が数々の成果を挙げてきている。そして、それらによって従来から幾人かの先学が主張されていたように、仏教の形成期に用いられた教説の内容や術語の多くは、決して仏陀釈尊や仏教教団の独創、つまり仏教固有のものではなく、当時のインド思想界一般のものと共通、或いは類似していることが一層明白となった。それ故、そのような研究者たちの作業努力は、文献間の借用関係に対する時代的考証に若干の未解決な問題を含むとはいいながら、学界に多大な貢献を寄与していることは疑いない。しかしながら、仏教独自の章句、術語ではないとしても、初期仏教聖典は少なくとも仏教教団の中では仏陀金口の教説として伝承されていた訳であり、何らかの編集方針のもとに断片的な教説が幾つかの集編に段階的に、そして組織的に纏められていったのである。

現存パーリニカーヤや漢訳阿含経は、その集成作業の最終的段階と呼べる四部、或いは五部という纏め方である。

また、その前段階には九分、或いは十二分という、主に形式的な分類による纏め方が存在していたことが伝えられている。そして、そのような大規模な組織的分類が行なわれる以前にも、断片的な素材が一つの作品に、或いは一編に編集されるという作業が徐々に作されていったと考えられる。『法句経』や『長老偈』等の原素材は、その名称や量的差異はどうであれ、経典伝承の最初期に纏められたことは想像に難くない。そして、この小論の研究資料である『スッタニパータ』第四章「アッタカヴァッガ」もそのような作品の一つと考えられる。

この「アッタカヴァッガ」は、『スッタニパータ』という南伝特有の集編に収められる以前は、明らかに単行の一編として伝持されていたことは後述する多くの証拠が物語っている。それでは、このような集編に纏められたことには、何らかの意図が介在していたのであろうか。或いはまた、そこに含まれる各経には内容や説示形式に共通点が存在するのであろうか。そして、その反対にもしそのようなものがないとしたなら、このような集成は当時散在していた章句を単に雑然と収集しただけのものなのか。

この小論は、以上のような疑問から端を発し、初期仏教経典の一集成単位としての「アッタカヴァッガ」が、どのような特徴を有する経典であり、初期教団の諸文献の中でどのような役割を果たすために編纂されたものなのか、というような点について若干の考察を意図したものである。

〔以下の論述に用いるパーリテキストは、特記のない限り、PTS 版を用い、略号等は、*A Critical Pāli Dictionary epilegomena to vol. I*, Copenhagen 1948. に依拠する。〕

一

「アッタカヴァッガ」（Aṭṭhaka-vagga＝Av）は、現在のパーリニカーヤでは、『スッタニパータ』（K No. 5

Sutta-nipāta＝Sn）の第四章に収められ、全一六経、総数二一〇偈から成る集編であることは今更言う迄もない。そして、Sn というより大規模な集成単位に収められる前段階には、単行の経典として伝持されていた時期が存在していたことは、以下に箇条書きによって示す理由から定説となっている。[1]

一、内容的にも（偈頌に関しては）ほぼ対応する漢訳『義足経』[2]や、サンスクリット断簡[3]が存在し、それらを伝えていた部派では Av が単経で伝持されていたことを示す。

二、パーリニカーヤ中にも、Av を独立した集編として扱いそれに註解を加えた『マハーニッデーサ』（K No. 11 Mahāniddesa＝Nidd I）が存在し、そこでは Sn の存在を予想させない。

三、Av（乃至はそれに対応する経名）は、パーリニカーヤだけでなく、漢訳諸文献にその名を引かれるが、Sn という名称はパーリ伝の文献にしか見い出せない。[4]

これらを考慮すると、Av はパーリ聖典史上でも、他の経典に引用される程古くから存在し、Nidd I というアビダンマ論書の先駆となったような文献[5]の成立頃迄[6]は単経として伝えられ、それ以降の或る時期に Sn というより大規模な集編に収められたと見て大過ないであろう。[7]

一方、北伝での Av（乃至はそれに対応する経典）は、部派の律論典にとどまらず、『大智度論』や『瑜伽論』にまで引用されているのであるから、後世迄単経として伝持されていたと考えられる。[8]そして、Av は特に諸律を主とした出典に関連して、従来より〝読誦経典〟と呼称される一群の経典類の中心的存在と見做されてきた。Av の内容的な考察に入る前に、まずこの読誦経典としての用いられ方について検討を加えておきたい。

諸律、そしてニカーヤ（阿含）に引かれる Av について、最初に詳細な検討を加えたのは Sylvain Lévi[9]氏であり、次いで P. V. Bapat,[10] N. A. Jayawickrama[11]の両氏が、また我が国では平川彰博士[12]や石上善応教授[13]らの論考が

ある。このうち、Bapat, Jayawickrama 両氏のものは、単経として古くより存在していたことの例証として、Av の出典箇所のみを列挙されたものであり、他の三氏のものは、広く網羅的に初期経典（平川博士のものは律典のみ）を中心にして、それらに登場する文献名が収集されている。このうち、最後の石上教授の論考は、それに先立つ教授の旧稿[14]の内容を敷衍し、更に Lévi 氏の見解をも踏まえた後、教授独自の新しい着眼点を示しておられる。そこではまず、諸仏典に存在する仏弟子たちによる経典読誦の記述を抽出し、読誦という行為の意義を検討され、更にそれらの箇所に見られる具体的経名を挙げ考察を加えておられる。その中で、諸律に見られる Soṇa（Skt. Śroṇa 億耳）説話を典拠とし、小論の資料である Av が、「比丘たる資格のある時期にテスト的要素をもって用いられたのではあるまいか[15]」との推論を下された。Soṇa 説話とは、Vinaya Mahāvagga によれば[16]、Avantī の長者の子であった Soṇa が、その地に伝道に来た Mahākaccāna（Mahākaccāyana 大迦旃延）によって教化され優婆塞からやがて比丘となり、仏陀に見えるために祇園精舎に赴き、仏陀の面前で Av を読誦するという物語である。パーリ文献では、これと同様の物語が Udāna V-6[17] や Dhp A[18] 等にも見られ、漢訳でも多くの律典[19]に登場する。[20]それらによると、Soṇa が読誦した経典はパーリ伝のように Av のみとするものの他に、諸律中には他の経典名を並記する場合も見られるが、『十誦律』の当該部分以外は少なくとも Av の名は登場する。[21]それでは、この一連の Soṇa 説話以外では Av がどのような用いられ方をしているのであろうか。以下に、Av が登場する他の箇所を示し、それらをも加えて筆者なりに考察してみたい。

まず、ニカーヤ中に既に Av の名が引かれ、それらの経典成立の時点で Av が権威を持って伝えられていたことを示すものに、S XXII-3-3[22] 及び 3-26[23] がある。そこでは、Mahākaccāna が Avantī に在った時、Hāliddikāni という在家居士（gahapati）が世尊の略説した偈の意味を彼に問う。その偈とは、「アッタカヴァッガのマーガン

ディヤの問い中のもの」（Aṭṭhakavaggike Māgandiya-pañhe）として、Sn 844（つまり Av No. 9 Māgandiya-sutta の第九偈）が引用される。これに対応する漢訳『雑阿含経』[24]にも、ほぼ同一の物語が存在する。これと、先の Soṇa 説話とに共通して登場する人物は Mahākaccāna である。そして、Soṇa は比丘になったとはいっても、彼のもとで出家して日の浅い新参の頃に世尊に見え、面前で経を読誦したのであるから、仏教経典に精通した多聞の弟子であったとは言い難い。そうすると、Soṇa 説話ではSoṇa がMahākaccāna に教化されて、彼の知った最初の経典の一つが Av であったというシチュエーションを背景に想定しても良いのではないか。一方、Hāliddikāni は在俗者であり、彼もまた出家者のようには経典に精通していたとは思われない。ましてや、Avantī は当時は辺境の地であり Mahākaccāna の布教前迄は仏教がどれだけ知られていたかすら疑問である。[25] つまり、Soṇa と Hāliddikāni の二人は、共に仏教を学んでまだ年浅い初学者と見て良いのではないか、という共通点が存在する。また、在俗者が Av を読誦するという物語は、系統の異った伝承ではあるが Divyāvadāna 等にも見られる。それによると、[26] 商人たちが航海の途中で、毎朝夕に次のような仏典を読誦したという。それらは、Udāna, Pārāyana, Satyadṛśa, Sthaviragāthā, Śailagāthā, Munigāthā, Arthavargīya であり、これらのうち、Pārāyana と Satyadṛśa を除く諸経を列挙する同一の物語が、『有部律薬事』[27]にも存在する。そうすると、これらは単に比丘のみが伝持していたものではなく、広く在俗者たちにも知られていた経典であり、Av は正にそれらを代表するものと言える。

一方、Av 等が初学者に教示される例としては、『摩訶僧祇律』巻一三[28]に、比丘が共行する未受具戒人（具足戒を受けていない弟子）に対して、「八群経、波羅耶那経、論難経、阿耨達池経、縁覚経」を授けることが説かれている。このうち「八群経」とは、先の Soṇa 説話の『摩訶僧祇律』での訳語例と照合して Av を指すと考えられる。[29] そして、同じ『摩訶僧祇律』巻二七には、次のような一文も存在している。

若比丘布薩説波羅提木叉時。賊入者卽應更誦餘経。若波羅延若八跋耆経若牟尼偈若法句。[30]

これによると、布薩時に比丘たちが集まって波羅提木叉を誦している最中に、もし賊が侵入したならば、他の経典、すなわち、波羅延（Pārāyana）や八跋耆（Av）以下の経典に代えよ、というのである。俗人の前での読誦を禁じる波羅提木叉が中止されるのは当然としても、その後にわざわざ Av 等を読誦することは、これらの経典と在俗者との関連を想起させるのではないだろうか。[31]

最後に、『雑阿含経』巻四九[32]に阿那律陀（Anuruddha）が畢陵伽鬼子母（夜叉女）の住処にて、夜分に「憂陀那、波羅延那、見真諦、諸上座所説偈、比丘尼所説偈、尸路偈、義品、牟尼偈、修多羅」を読誦したという記述が知られている。この読誦経典類は、Soṇa 説話の諸律での列挙経典に類似している。また、夜叉女に対して読誦し、鬼神道よりの解脱の道を示したと偈にあることは、在俗者への教示の範疇に入るべきものとして考慮すべきかも知れない。しかし、これに対する S X-6 には具体的経典名を挙げずに唯 dhammapadāni bhāsati[34] とのみあり、『別訳雑阿含経』[35]も相違するので多くは触れないことにしたい。[36]

さて、以上の用例の多くは、既に前述の諸先学の論考に指摘されていたものではあるが、このように総合してみると、そこには或る共通点が見い出せるのではないだろうか。それは、Av を中心とする所謂〝読誦経典〟というものは、仏教の専門家、つまり古参の比丘たちと関連して説かれた箇所は存在せず、それらのいずれにも新参の比丘（『摩訶僧祇律』巻一三の場合は具足戒も受けていない弟子）や在俗者たちとの関わりの場面に登場するという特徴的な点である。そうすると、読誦経典とは仏教のエキスパートではない初学者向けの経典ではなかったかと推論でき、しかも、Soṇa 説話のパーリ伝承では彼の読誦したものは Av 唯一つであったように、それら読誦経典を代表するものが Av であると考えられる訳である。そして、そのような経典であったからこそ、Mahākaccāna の

ような辺境布教に功績があった[87]仏弟子と関連して登場することも首肯できるのではないだろうか。

仏弟子たち、特に伝道布教に活躍した人々が各々固有の経典を奉持していたことは、アショーカ王治政下の伝道師たちが特定の経典によって人々を教化したことを列挙する伝承によっても推察される。[88]但し、それらの中に Av は含まれてはいないが、布教活動の祖のような Mahākaccāna と本経との関連が少しく見い出されるのであるから、そのような目的に用いられたのではないかという推測も可能である。そして、Av を知ること、そして読誦することが仏教者への第一ステップであり、当時の仏教者たちが、まず最初に修学すべき経典の代表であったからこそ、布教伝道と共に在俗者にもその内容が知れ亘っていたものと考えられないだろうか。このように推論してゆくと、先述の石上教授の見解は更に拡大され、Av は仏教者として修学の第一段階の経典であり、そのような性格のものであったからこそ、在俗者にも浸透していたのではなかったかという問題が提起される。

Av は、今日学界の定説となっているように、最古の経典資料の代表であることは疑いないであろう。しかし、最古のものとは言っても、当時の教団の伝持する経典がこれのみであったとは考えられない。現存資料では増広、改変が繰り返され、原形を探ることが困難になっているものもあるとしても、ニカーヤ中の多くの経典の原伝承はかなり早くから教団の人々の記憶の中に伝えられていた筈である。Av が最古のものという評価の中には、これが全編偈頌であったことから改変を蒙り難く、従って原伝承に近いものがそのまま伝えられて今日に至ったという意味も含まれていると解せる。そうすると、幸いにも Av には、後代の部派的色彩や発達した教理が挿入され難かったと考えられる。では、このような集編が何故、先に推論したような用途に用いられたのであろうか。Av が古形を保っているとするならば、必らずやその内容にもこの経典が仏教修学の入門書たることを示唆する証拠が検出されなくてはならない。そこで、次には Av の教説内容を吟味し、考察を加えてゆくことになる。

二

Av は、その成立当初から現在見られるような一六経二一〇偈という構成であったかについては異論も存在する。P. V. Bapat,[38] G. C. Pande[39] 両氏や、我が国では中村元博士[40]が主張されるように、Aṭṭhaka＝Skt. Aṣṭaka（八つよりなるもの）と解して、元来は八偈構成の経（現在の一六経中では、第二～五経がそれに相当）のみで構成されていたからその名が付いたという説である。確かにそれらの経には、それぞれ、No. 2 Guhaṭṭhaka-sutta, 3 Duṭṭhaṭṭhaka-s°, 4 Suddhaṭṭhaka-s°, 5 Paramaṭṭhaka-s°。というように、-aṭṭhaka の語が経名に付されているから、このような説も考慮しなければならない。しかし、現存する文献資料からそれを支持するものは、僅かに『摩訶僧祇律』に「八跋祇経」[41]等という訳語例が存在するのみである。しかし、Av を「義品」[42]等と訳す場合に想定される Skt. 形 Artha〔-ka〕も、先の Aṣṭa〔-ka〕も、共に俗語形として Aṭṭha（乃至は Attha）を有している[43]から、漢訳語のこの用例のみでは元来これらの八偈経だけの構成であったことを証明する決め手とはならない。更に、Jayawickrama 氏によれば、八偈構成の経典に付された -aṭṭhaka という名称は、本来的に artha の意味で用いられており、それらが八偈経であるということは偶然的な事象であるとまで主張されている[44]。これに対して、以下の諸点はかなり早くより Av が八偈経だけでなく、現存の一六経の形態によって伝えられていたことを示している。

一、漢訳『義足経』は、Av と同様一六経で、各偈も殆ど対応するものを見い出せる[45]。

二、二種の Skt. 断簡は、共に Arthavargīya[46]（或いは Arthakavargīya）[47]という経名を伝え、先の八偈経に相当する部分以外の偈を含む[48]。

三、前節で指摘した S XXII-3-3, 3-26 で引用される Sn 844 も八偈経以外の部分である。

四、北伝の律典中に「十六句義」「十六義品」等の語が見い出され、[50]今日の Av と同数の経数を有していたことが解る。

これらの諸点を考慮すると、年代は明確にできないが、かなり早い時代に Av は現存形に近い形態で伝持されていて、その段階では、Aṭṭha〔-ka〕=Skt. Artha〔-ka〕=義の意味に解されていたことは首肯されよう。また、一六経という経数も Av と共に初期には単経として伝えられていたと考えられる Sn 第五章 Pārāyanavagga も本来は一六経であったことや、[51]ジャイナ教聖典にもいくつかの一六章構成の経典が存在することからも、[52]かなり古い時代（それは、釈尊在世時代に迄遡ると考える説がある程）[53]から固定されていたのではないだろうか。また例えば、パーリ聖典の偈頌の随所に、「一六分の一にも値いしない（kalaṃ nagghati soḷasiṃ）」という定型表現が見られるように、[54]一六という数が一つの区切り、或いは満数を示していることも考慮すべきであろう。[55]

いずれにしても、Av は経典伝承の最初期に存在し、経数も現存形に近い形態であったと推察されるが、それでは、そのように編纂されるべき有機的な連関が見い出されるかと言えば、必らずしもそれを端的に示す証拠は容易に検出できない。各経の偈数にも一貫性はないし、形態的な面からはそれらは総て偈頌だけの経典ということが唯一つの共通点である。しかし、唯それだけの理由で無作為に収集されて一編が構成されたのであろうか。一六経の説示内容に何らかの類似性は存在しないのだろうか。既に和訳だけでも何種類[56]か存在し、内容梗概[57]も発表されているのであるから、徒らに紙数を費して説示内容の総てを紹介することは避けたい。また、最古層の経典として仏教思想の重要概念の萌芽を求める研究や、[58]類似平行句を見い出す作業[59]も数多く発表されている。しかし、それら個々の成果は別として、Av をあくまでも一つの集成単位として眺める時、この一六経には物語としての連続性はなくとも、そのいずれに於ても常に仏教以外の思想への批判、排斥が強調されているという特徴に気付く。

ところで、Sn 全体に亘って、当時仏教と勢力を競ったであろう自由思想家やブラフマニズムへの批判、論駁が色濃いことは、既に古くは英訳者 V. Fausböll 氏も指摘[61]されている。しかし、その Sn の中でもこのような性格は Av に最も顕著に表われるのである。それを示す端的な一例を挙げてみよう。パーリ語で思想家の見解を表わすのに、diṭṭhi という単語[62]が最も一般的に用いられる。そして、この語は Sn では重複を含めて合計四六回用いられるのであるが、実にそのうちの三八回が Av 中で使用されている。[63] 数量の上から一概に断定できないとしても、Sn 全一一四九偈（と散文）中の五分の一に満たない Av の二一〇偈に、実に用例の八割以上が集中している。このことは、少なくとも Av の内容がそのようなテーマに対して如何に多く言及しているかを証明していることにはなるだろう。そして、具体的な内容の点でも、各経毎に常に何らかの邪見を例として挙げ、それに対する正しい見解（つまりは仏教の考え方）を明らかにするという形式をとっている。

Av がいかに他思想との対抗を想起させ、それらに対する論難が多いかを二三の例によって指摘しておこう。

まず 778～779 は、極端論を排し、この世や彼の世（lokaṃ imaṃ paraṅ ca）を求めるという輪廻思想を批判する。また、執著、貪りは終始批判されるが、795c の

貪欲を貪らず、離欲も求めない。（na rāgarāgī na virāgaratto）

という立場は、先の極端論批判と共に、快楽主義や禁欲主義への論駁であろう。

次に、796～797には、自己の考え方に固執して他と優劣を競う有様が説かれている。これと同様の表現は、824～828, 878～879,[64] 883 にも見られる。当時の思想家たちは、自らの思想を主張し合い優位性を競ったのであろう。それ故、862等では、多くの紛争や争論があることを嘆いている。

また、816～820では、修行者迄もが婬欲に耽り堕落している姿が表現されている。そして、バラモンの学術知識

への批判は 839～843 を初めとして諸所に見い出せる。

これらを代表例として、作すべきではない事、またそれを行なっている人々に対する非難は枚挙にいとまがない。そして、それらを問題提起として、正しくはどうあるべきかを説示するのである。Av 一六経の総てが、そのような説示方法であると言っても過言ではない。その中には在俗者の迷妄に対する批判が主となっている経典（No. 6 Jarāsutta）も存在する。しかし、それとても他経が仏教と他思想との対比であるのに対して、そこでは仏教者と在俗者との対比に過ぎない。つまり、他を批判して自らの優越性を強調するという点では共通している。しかしながら、勿論このことが仏教経典として特殊なものであると言うのではない。他思想を邪見として排することは、初期経典以来、所謂破邪顕正の立場としていつの時代の文献であっても、仏教（或いは自派）の正当性を主張する重要な論法の一つである。しかし、Av のように終始一貫して他の批判に重点が置かれている経典というのは、それだけ仏教に対抗する存在が強く意識されていることを物語っているのではないだろうか。

仏教教団は最初期から、決して強大な勢力を有していた訳ではない。種々の思想家（或いは思想家集団）が乱立し、共存する中で、彼らと対抗し合いながら教線を拡大して行ったと考えられる。すると、その発展のためにまず何よりも必要であったことは、自派の思想の優位性を強調することであろう。そして、そのための最も有効な手段は、他との対比によって自らの正当性を訴えることである。これは、在俗者を仏教者にするためにも、他派の出家者を転宗させるためにも共通する方法である。Av は屢々触れたように、聖典類の最初期の所産である。そうすると、その最初期は仏教教団の発展期でもあった筈である。そして、発展期に自派の立場を他との対比によって宣揚するような経典が必要であったとするならば、正に Av がその端的な例を示すものではないだろうか。このことは、前節でこの経典が仏教修学の入門書たる用いられ方をしていたのではないかと推論したことと決して矛盾するもの

ではない。例えば、Mahākaccāna のような伝道師たちが、他の思想家や在俗者たちに対して教化活動を行なう時、最初から教理を詳しく解説したような綱要書的な経典を説示するであろうか。むしろ、他の思想、或いは迷妄の在俗者の考え方を批判した上で、簡便に仏教の優位性を主張するようなものによって彼らを導いた、と考える方が妥当ではないだろうか。そうすると、これ迄見たように、Av の内容はそのような用途に最も適したものと推察される訳である。

三　結論にかえて

小論はこれ迄、読誦経典と呼ばれる幾つかの初期経典を代表するものである Av を資料として、それがどのような状況で用いられたものかということと、その集編が全体としていかなる内容的特徴を有しているのかという二点から若干の考察を進めてきた。その結果、前者では、ニカーヤ・阿含、そして諸律典等比較的初期の文献に Av が登場する場合、必らず在俗者か新参比丘が絡んだ状況があり、決して古参の比丘間でこれが読誦されたりしたような記述が存在しない点から、仏教修学のための入門書的な用途で用いられていたのではないかと推察した。そして、後者の内容的な問題に於ても、Av は煩瑣な教理を解説したり、思想書という類のものではなく、主に仏教と対峙する他思想（乃至は思想家集団）を意識して、彼らを批判し仏教の優位性を宣揚することを目的とした経典が集まっているという特徴[86]を見い出した。この二点は、筆者が初期仏教の発展期に教団が教線を拡大せんとする状況下で、Av が布教伝道の経典の一つとして用いられたのではないかという仮説を展開する上での外的、そして内的な根拠である。そこで、このような立場にたった時、今後解決しなければならない問題も幾つか残っているので、紙数が許される限りこれからの研究課題として提示しておきたい。

まず第一の問題として、Av が破邪顕正の立場を強調していながら、そこに用いられている語句に批判の対象であった外教、特にジャイナ教の聖典類に見られる偈頌との平行句が存在することに或いは疑問を感じるかも知れないという点がある。もし、仏教とジャイナ教等との思想の核心に触れるところで、両者の文献に平行句が存在するなら、それを自派宣揚の経典と呼ぶことは躊躇しなければならないからである。そこで、Av 中のジャイナ聖典との平行句を W. Bollée 氏等の指摘[8]によって比較すると、次の七偈一二句に及んでいる。

Sn 769[ab] khettaṃ vatthuṃ hiraññaṃ vā gavāssaṃ dasaporisaṃ

＝Utt 3.17[ab]＝19.16[a] khettaṃ vatthuṃ hiraṇṇaṃ ca pasavo dāsa porusaṃ

耕地や、屋敷や、黄金を、或いは牛や馬（Utt は子孫）や奴隷を、

805[ab] socanti janā mamāyite na hi santi niccā pariggahā

＝Sūy 1.2.2.9[cd] soyanti ya ṇaṃ mamāyiṇo no labbhatī[9] ṇitiyaṃ pariggahaṃ

我執あるとき人は愁い悲しむ、執着するものに常住なものはないから、

810 Patilīnacarassa bhikkhuno bhajamānassa vivittam āsanaṃ[8]

sāmaggiyam āhu tassa taṃ yo attānaṃ bhavane na dassaye.

＝Sūy 1.2.2.17. uvaṇītatarassa tāiṇo bhayamāṇassa vivittamāsaṇaṃ

sāmāiyam āhu tassa taṃ[8] jo appāṇa bhae na daṃsae

独処の比丘として遠離した坐処に親しむ。彼が（俗）世に自己をあらわさないなら、彼にはふさわしいことがあると言われる。

811[a] sabbattha muni anissito

＝Sūy 1.2.2.7ᵇ　savvaṭṭhesu sadā a-ṇissite

牟尼（Sūy 欠）はどこにも依るものがない。

922ᶜ　rase ca nānugijjheyya

＝Utt 2.39ᶜ　rasesu ṇāṇugijjhijjā

味覚を貪るべきではない。

936ᵇ　macche appodake yathā

＝Sūy 1.3.1.5ᵈ　macchā appodae jadhā

水が不足した魚のように、

950ᵇ　yassa n'atthi mamāyitaṃ

＝Āyār 1.2.6.2　jassa n'atthi mamāiyaṃ

我がものという想いがない。

これらのうち、Sn 769ᵃᵇ は、各々執着の対象を列挙したものであり、936ᵇ の比喩は渇愛によって動揺した様子を喩えたものである。そして、810 は 811ᵃ に続くことで明らかなように、独処して執着を滅することを奨めたものと解しうる。そうすると、これらの平行句は総て内容的には無執着の立場を説き明かしていることに気付く。無執着、つまり、欲望を抑え、貪欲の対象を滅するという理念は、何も仏教やジャイナ教のみに限ったものではなく、古代インドの一般の出家者たちにとっては、共通の立場であったと言えるのではないだろうか。[70] 従って、個々の宗教独自の思想ではないのだから、汎宗教的な定型表現として用い、他派がそれを実践しないこと自体を批判することは差支えないと考えられる。

更に、Av の個々の偈頌の成立史的問題を論ずる場合、より厳密な比較研究が必要であろうが、小論では集編としての Av の教団伝承の中での立場を探ることを念頭に置いている。それ故、このような問題は、現在の筆者の力量外のところでもあり、今はしばらく措くことにする。

上記は、Av が集編として伝持される前史上の問題であるが、次に考えるべきは、これら読誦経典と九分・一二分教、更には四部・五部阿含（ニカーヤ）への推移の問題であり、それは文献史的には後の時代との連関についての考察と言える。Av だけでなく、Pārāyana, Śailagāthā, Munigāthā 等、主に有部系の伝承に登場する他の読誦経典に対して個々に考察を加える必要性もさることながら、[71] これらの経典類が九分・一二分教[72]を経て五部中の小部雑蔵を構成するものであることは注意しておかなければならないであろう。これら明らかに古層の経典類が、やや遅れて成立した[73]小部雑蔵に配されることになった経緯については、未だ決定的な定説は存在しない。[74] しかし、この点に関しても、筆者は明快な論陣を張る用意はない。[75]

以上のように、課題ばかりが山積みされた考察に終始したが、小論が今後、他の初期経典類の検討をも加え、それらの伝承の様態というものを探る端緒となりえることを願う次第である。

註

① Sn に関説する研究書、論文は極めて多いが、そのうち、Av が単行の経典であったことに言及する主なものを列挙すると次の通り。

B. C. Law, *A History of Pāli Literature*, London, 1933. vol. I p. 233.

N. A. Jayawickrama, A Critical Analysis of the Pāli Sutta Nipāta, Illustrating Its Gradual Growth, *University of Ceylon Review*, colombo, 1948–1951 (vol. Ⅶ-1～Ⅸ-2), vol. Ⅵ-4 pp. 229～239.

P. V. Bapat, The Arthapada-Sūtra Spoken by the Buddha, *Visvabharati Annals*, Santiniketan, 1950, vol. Ⅲ, p. 89. (同名にて、1951 に単行本として刊行)

G. C. Pande, *Studies in the Origins of Buddhism*, Allahabad, 1957 (2nd. Delhi 1974), pp. 53～54.

前田惠学『原始仏教聖典の成立史的研究』山喜房仏書林・東京、昭三九、pp. 727～732.

尚、上記 Jayawickrama 氏の論文は、同誌に一三回に亘って掲載され、Sn 研究の集大成的成果として著名なものでありながら、同時に入手困難なものとしても知られている。幸いにも筆者は愛知学院大学教授前田惠学博士の御好意により、一三回中の殆どを複写させていただくことができた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

② 『義足経』(二巻) 支謙訳　大正蔵第四巻 (No. 198) pp. 174～189.

尚、Bapat 註①書は本経を英訳し、Av と対照したもの。また、水野弘元「Artha-pada-sūtra (義足経) について」(印仏研一巻一(一) pp. 87～95 参照。そこで、博士は本経は無畏山寺派所伝のものではないかと推論されているが、それについては機会があれば別に論じてみたい。

③ A. F. R. Hoernle, The Suttanipāta in a Sanskrit version from Eastern Turkestan, *JRAS.*, London 1916, pp. 709～732, 1917, p. 134.

また、近年、別の断簡が新たに発表された。

Lose Sander und Ernst Waldschmidt, *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden* Teil Ⅳ, Wiesbaden, 1980, pp. 240-241.

④ 前田惠学博士は、Sn の名が初めて登場するのはブッダゴーサ (Buddhaghosa) の書であるとされる。(註①書 p. 732) 但し、Mil p. 411, 414 にも本偈の引用と共に Sn の名が登場する。いずれにしても、Mil のこの部分はパーリ伝のみの増広部分と見做されているから、他系統の文献では Sn の名は確認されない。

⑤ 木村泰賢『阿毘達磨論の研究』(全集第四巻) 大法輪閣・東京、昭四三、pp. 51～54.

⑥ 水野弘元「巴利聖典成立史上における無碍解道及び義釈の地位」(一)(二)(三)(『仏教研究』四巻三・五・六号) 特に (三)p. 57 以下。

⑦ 水野弘元博士は、Mil の後半部分の成立を諸説を考慮された上で、西暦紀元前後と推定された。(「ミリンダ問経類について」『駒沢大学研究紀要』第一七号 p. 55) また、Nidd I は、註⑥論文によると、西暦前二世紀前後とされる。(三 p. 61) すると、Sn の成立はその間と推測されるのであるが、今はこの年代の是非を考察する用意はない。

⑧ 水野弘元博士の和訳 (南伝大蔵経一四巻 pp. 297～298)、及び同註②論文 p. 89 参照。

⑨S. Lévi, La Récitation Primitive des Textes Bo-

uddhiques, *JA*, 11e série Tome 5, Paris, 1915.

⑩ P. V. Bapat 註①論文（書）introduction.

⑪ N. A. Jayawickrama 註①論文。

⑫ 平川彰『律蔵の研究』山喜房仏書林・東京，昭三五，pp. 759～791.

⑬ 石上善応「初期仏教における読誦の意味と読誦経典について」（『三康文化研究所年報』第二号）pp. 45～90.

⑭ 石上善応「仏教初期の読誦経典について」（『大正大学宗教文化』第一一号，昭三一）pp. 48～58.

⑮ 石上註⑬論文 p. 85 尚，これは同所にあるように，「共通的に憶耳伝説ではあるが，……修行段階における一形式を教示しているように思われ…またすべての律蔵の典拠となっている点より考えて…」という推定より導き出された見解である。

⑯ Vin vol. I pp. 196～197.

⑰ Ud Soṇatherassa-vaggo pp. 57～59.

⑱ Dhp A vol. IV p, 102 他に Aṭṭhakathā 文献中では，AA (Mp) vol. I p. 241, ThA (Pd) vol. II pp. 154～155 にも見られる。

⑲『四分律』巻三九（大正蔵第二二巻 p. 845c），『五分律』巻二一（二二巻 p. 144b），『摩訶僧祇律』巻二三（二二巻 p. 416a），『十誦律』巻二五（二三巻 p. 181b）但し，『十誦律』には，Av に相当する経名を欠く。

⑳『根本有部律』および Divyāvadāna には Śroṇa (= Soṇa) の前生譚を含むかなり増広された物語が伝えられている。そのうち，彼が仏陀の面前に見える箇所は次の通り。

N. Dutt, *Gilgit Manuscripts* vol. III part IV, Culcutta 1950, p. 188.

E. B. Cowell & R. A. Neil, *The Divyāvadāna*, Cambridge, 1886 (rep. Amsterdam 1970), pp. 34～35.

㉑ 石上註⑬論文 p. 80 に，これらの資料による一覧表が掲載されている。

㉒ S vol. III p. 9.

㉓ 同右 p. 12.

㉔『雑阿含経』巻二〇，大正蔵第二巻 p.144 b～c.

㉕ Mahākaccāna の Avantī 布教については，水野弘元博士によって指摘され，次いで前田惠学博士が詳細に論じられた。

水野「初期仏教の印度に於ける流通分布に就いて」（『仏教研究』第七巻四号）pp. 19～20.

前田「原始仏教教団発展史上における大迦旃延の位置」（『印仏研』三巻一号）pp. 266～269. 及び註①書 pp. 118～130.

㉖ Divy 註⑳書 pp. 34～35.

㉗『根本有部律』巻三，大正蔵第二四巻 p. 11b.

㉘ 大正蔵第二二巻 pp. 336c～337a.

㉙ 『摩訶僧祇律』註⑲の箇所、及び後巻二七では、「八跋祇経」「八跋耆経」と記し、訳語に相違が見られるが、ここでは S. Lévi 氏の解釈 (Aṣṭa-varga sūtra) に従い、Av を指すものと解した。(Lévi 註⑨論文 p. 423 参照)。尚、「八跋祇経」等が、Av を指すことは次章参照。

㉚ 大正蔵第二二巻 p. 447c.

㉛ 平川註⑲書 pp. 37～38.

㉜ 大正蔵第二巻 p. 362c

㉝ S vol. I p. 209.

㉞ これについては、水野弘元「ウダーナと法句」(『駒沢大学学報』復刊第二号) pp. 12～13. (後、『法句経の研究』春秋社・東京、昭五六)

㉟ 大正蔵第二巻 pp. 480c～481a.

㊱ 石上教授は『雑阿含経』等での経典名の列挙は、それらの部派の読誦経典が插入されたものと推定されている。(註⑬論文 pp. 74～76)

㊲ 註㉙論文参照。

㊳ 仏弟子一人一人が、総ての経典類を完全に伝持していたとは考え難い。むしろ、彼らはその任に応じた、或いはその読誦を得意としたような固有の経典というようなものを有していたのではないだろうか。例えば伝道師たちについても、Dv 12-26 で Majjhantika が Āsivisūpamadhamma を読誦して人々を教化したというような記述が見られる。これらは、各々の比丘たちが尊ら奉持していた経典というものを象徴しているのではないだろうか。尚、他の伝道師たちが読誦した経典名については、前田註①書 pp. 142～146 に詳しい。また、経典類の伝持に分担があったことについては、塚本啓祥博士が種々に論じておられるが、代表的なものとして、『初期仏教教団史の研究』(山喜房仏書林・東京、昭四一、増補改訂昭五五) pp. 386～409 がある。

㊴ Bapat 註①論文 pp. 107～108.

㊵ Pande 註①書 p. 56 & 65.

㊶ 中村元『ブッダのことば――スッタニパータ』(岩波文庫・昭三三) 註記 p. 245.

㊷ 「八跋祇経」、「八群経」、「八跋耆経」それぞれ註⑲、㉙、㉚を参照。

㊸ 経名の漢訳例については、水野弘元博士による和訳(南伝二四巻) 訳註 (pp. 297～298) 及び註②論文 p. 89 に指摘されている。また、それら以外に、「義品」(大正蔵第二巻 p. 362c、二七巻 p. 660a)、「衆義経」(二四巻 p. 11b、二五巻 p. 60c) 等が存在する。

㊹ R. L. Turner, *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*, London (Oxford), 1969, p.

29 (No. 638), p. 41 (No. 941).

㊺ Jayawickrama 註①論文 vol. Ⅳ-4 pp. 236〜239. それによると、第一経 guhaṭṭhaka-s° の guha, 及び順次 Duṭṭhaṭṭhaka-s° の Duṭṭha, Suddhaṭṭhaka-s° の suddha, Paramaṭṭhaka-s° の Parama は、総てそれらの冒頭の偈の a 句に存在する。そして、各経はそれらを中心主題として説示されており、まさに〝それらの意味を明かす〟ということから aṭṭhaka と呼称されたのであると解されている。

㊻ Bapat 註①論文の和訳に対応偈が並記されている。また、後述の水野弘元博士の対照表にも指摘されている。

㊼ Waldschmidt 註③書 p. 240 に、…arthavarg〔gī〕//(C8² A¹5) が確認される。

㊽ Hoernle 註③論文 p. 711 に artthakavargīyaṁ sūtraṁ (Frag. I-4) が確認される。同様に p. 715

㊾ Skt. 原典では、*AbhidharmaKośabhāṣya* にも Arthavargīya として八偈経以外の偈が引用される。(*Abhidharmakośabhaṣya* ed. P. Pradhan, Patna, 1967, p. 9)

㊿ 「一六句義」は『四分律』、「一六義品」は『五分律』での訳語。共に註⑲参照。

(51) 例えば、Nidd Ⅱ の pārāyanavagga に対する註釈は「第一六番目の Piṅgiyasuttanta (Pārāyanavaggo niṭṭhito Piṇgiya-suttantaṃ soḷasi)」として終わっている。(p. 56)

(52) Wiliem B. Bollée, *The Pādas of the Suttanipāta*, (Studien zur Indologie und Iranistik Monographie 7) Reinbek, 1980. Intro. Ⅵ〜Ⅶ.

(53) 水野註②論文 p. 88.

(54) Dhp 70ᵈ, Th 1171ᵈ, S vol. Ⅰ p. 211, A vol. Ⅱ p. 70. また散文中では、It p. 20, A vol. Ⅰ p. 166, 168 等多数。

(55) これに対して、本来一六経であったことに疑問を投げかける資料として、Soṇa 説話のパーリ伝(註⑯〜⑱)中、Vin では Sabbān'eva aṭṭhakavaggikāni とあるが、Ud, DhpA では、soḷasa aṭṭhakavaggikāni sabbāni と経数が明記されていることが挙げられる。これらのうち、Vin の伝承が起源的なものとするなら、一六 (soḷasa) という経数は、Av の現存形を意識して後に付加されたものとも考えられるが、これのみでは積極的な資料とはなり難い。尚、Th A の経数の variants について Jayawickrama 氏が論及されている。(註①論文 pp. 236〜237)

(56) 邦訳については、中村註㊹書、及び同書 pp. 271〜273 参照。またその他として次書。
渡辺照宏訳『世界の大思想Ⅱ—仏典』(河出書房新社・

東京）所収、後『渡辺照宏著作集』第五巻・仏教聖典一（筑摩書房・東京、昭五七）

㊼ 三枝充悳「スッタニパータ第四・五章の梗概」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第4号）pp. 5～14、Av については pp. 7～11.

㊽ 縁起説の原初形態をAv中の偈に求めた中村元博士の見解（『原始仏教の思想』選集第一四巻 pp. 47～52）を初めとして、部分的な論及は枚挙にいとまがない。

㊾ R. Otto Franke, Die Suttanipāta-Gāthās mit ihren Parallelen, *ZDMG*, Band 63(1909), 64(1910), 66(1912). (尚、1912 に Leipzig にて合本され単行本として公刊)

水野弘元「経集対照表」（南伝一四巻巻末 pp. 1～19）

同　「経集の偈と他文献との対照表」㈠～㈣（『ピタカ』㈢～㈥所収）

㊿ 当時の自由思想家たちの様態を集成したものとしては、雲井昭善『仏教興起時代の思想研究』（平楽寺書店・京都、昭四二年）が、最も著名。

(61) V. Fausböll, Suttanipāta (Eng. trans., *SBE* vol. X) intro. xii.

(62) 註(61)書で Fausböll 氏は diṭṭhi＝darśana と定義し、類語も指摘している。また、荒牧典俊氏は、Av をテーマとした研究論文に於て、diṭṭhi に「宗教的ドグマ」という訳語を与えておられる。「Suttanipāta Aṭṭhakavagga に見られる論争批判について」（『中川善教先生頌徳記念論集・仏教と文化』昭五八）

(63) diṭṭhi の出典は次の通り。

781ᵃ, 785ᵃ, 786ᵇ, 787ᵈ, 788ᵇ, 789ᵃ, 789ᵈ, 796ᵃ, 799ᵃ, 800ᵈ, 802ᶜ, 832ᵃ, 833ᵇ（二回）, 837ᶜ, 839ᵃ, 840ᵃ,ᶠ, 841ᵃ, 846ᵃ, 847ᶜ, 851ᵈ, 878ᵃ, 880ᵈ, 881ᵈ, 882ᶜ, 886ᶜ, 889ᵈ, 895ᵃ, 908ᵇ, 910ᵇ, 834ᵇ, 836ᶜ, 913ᶜ, ＝diṭṭhigataṃ, 839ᶜ (840ᶜ)＝adiṭṭhiyā, 881ᵃ＝sandiṭṭhiyā, 889ᵃ＝atīsaṃdiṭṭhiyā, 911ᵇ＝diṭṭhisārin.

以上、Av 中の箇所。それ以外は次の八箇所。

55ᵃ, 116ᶜ, 243ᶜ, 471ᵇ, 474ᵇ, 649ᵇ, 1078ᵃ, 1117ᶜ

尚、ここでは、p.p. 形 diṭṭha は除外してあるが、Av に屢々登場する diṭṭha suta muta の並記については荒牧註(62)論文参照。また、471ᵇ は paramāya diṭṭhiyā で、仏陀の知見を示しており、他の思想批判のために用いられたものではないが、用語例として列記しておいた。

(64) 雲井昭善博士は、この 878～879 を指摘され、「当時の思想界の混乱、諸異説の対立を語って余りあろう」と評しておられる。（「ブッダにおける対話の在り方」『仏教研究』第二号 pp. 28～29）

(65) 荒牧典俊氏は註(62)論文で、他教の文献をも駆使して、Av に他学派間の宗教論争の批判が極めて多く存在する

ことを論証された。氏は、そこで「論争批判によって仏教の根本的立場がひらかれてきた…」とも述べられている。(p. 143) もとより小論は氏とは異った立場から考察を加えている訳であるが、氏の炯眼による見解とも決して矛盾するものではないと考える。

⑥⑥ Bollée 註㊷書。また、これとは別に谷川泰教氏も部分的に指摘されている。「『スッタニパータ』第八一〇偈をめぐって」(『仏教学会報』高野山大学第八号 pp. 5〜12)

⑥⑦ Bollée 氏は labbhanti を挙げるが、構文上異本に存在する語形を採用した。

⑥⑧ PTS は vivittamānasaṃ。谷川氏が sūy と比較してこれを訂正(註㊺論文 p. 6)、筆者も別に指摘した。(「パーリ文献史研究の一視点—スッタニパータ第四・五章を資料として」『仏教史学研究』第二四巻一号 p. 18)

⑥⑨ Bollée 氏の読み jam を異本により訂正。(谷川註㊻論文 pp. 6〜7 参照)

⑦⓪ 我執の排除は、インド思想界に共通的な理念であることは屢々論証されているが代表的なものとして、中村元「インド思想一般から見た無我思想」(『自我と無我』平楽寺書店・京都、昭五一) pp. 8〜27.

⑦① 既に、石上氏が当時としては最も妥当な見解を述べておられる。(註⑬論文 pp. 83〜89) 但し、Dhammapada の比定に関しては、Brough ed. 未刊当時であったため、今日ではやや修正を要すると考えられる。

⑦② Av は伝統的な分教の解釈では、南伝では Sutta に (DA vol. I p. 23)、それに対して『婆沙論』巻一二六 (大正蔵二七巻 p. 660c) では因縁 (nidāna) に配される。小論では触れなかったが、Av は部派によっては散文が付加されて伝承されたことは漢訳等から知られるから、そのような形態のものが分教中の因縁と理解されたのであろう。しかし、後代の解釈とは言え、分教の内容比定に同一経典が異った支分の代表として挙げられていることは注意すべきであろう。

⑦③ 宇井伯寿「原始仏教資料論」(『印度哲学研究』第二巻甲子社書房・東京、大一四、後 岩波書店) p. 142, 155. 前田註①書 pp. 694〜695.

⑦④ 小部雑蔵の成立史的研究についての成果は前田註①書 pp. 681〜698 に詳しい。そこでのもの以外として、干潟龍祥「Suttanipāta の研究総括」(『仏教学雑誌』三巻二号 pp. 143, 145〜146)
渡辺文麿「クッダカニカーヤのオリジナル考」(『印仏研』二八巻一(一) pp. (54)〜(59)

⑦⑤ 山田明爾氏は、辟支仏の起源問題に関連して、K の古経は、正法の護持という教団の統一理念から外れていたものではないかとの問題を提起しておられる。(「辟支仏

・独覚・縁覚」『龍谷大学論集』四一五号 p. 109 以下）また前田博士も、四部四阿含が発達すると、聖典の権威の中心はそちらに移行し、重視されるようになったとの見解を述べておられる。（註①書 p. 689）

一方Avには、教理や修道法の詳説はなく、教理解釈を一種の哲学的見解と見るなら、それを否定するような表現も存在する（839, 856, 894, 910, 914）。更には、独行を奨める立場（957～958）は、僧伽の集団生活とも相容れない。そして専ら他教批判に重点を置いていることを考慮するなら、安定期の教団に於ては重視されなくなったとも推測できる。しかしながら、このような問題は、Av だけでなく小部の総ての経典を資料吟味した後に論じなければならない。

（一九八三―一一―一〇）

（文学研究科博士後期課程・仏教学専攻）

used fortysix times in the whole of *Sn*, and here we can point out thirtyeight examples in *Av*. This instance, to say the least, suggests that all suttas of *Av* regard the subject as important.

And in these suttas, it is a well-worn device to emphasize a true way by criticizing other religious schools, and these concrete examples are too many to enumerate.

This standpoint shows directly that the establishment of *Av* was organized at a very early time, co-existing with many religious schools, while it compared the Buddhist way with other ones and extoled the former. This does not contradict the hypothesis put forward above. If anything, it may be deduced that *Av* which establishs the superiority of Buddhism by the above way is adapted in order to enlighten peoples.

are also found in the *Divyāvadāna* and the *Mūlasarvāstivādavinaya*. In these versions, it is described that marchants recite *Av* and other literatures for a safe voyage. On the other hand, in the Vinaya of Mahāsaṅghikas, it is handed down that the pupil, who doesn't confer upasampadā, is taught *Av* by his teacher. In the same book, another episode is also stated as follows. That is to say, if a thieve invades at the Uposatha-time, Bhikkhus should stop reciting the Pātimokkha, and recite *Av* instead of it for the sake of him.

The whole statements above are explained in situations concerned with a beginner priest or non-priest. It appears that *Av* and others never been recited among senior priests, moreover it must be noticed to connect with preachers like Mahā-Kaccāna. We can guess that, *Av* is one of books that Buddhists learn at first in that time, and preachers use it as means of propagation. However we must adduce evidences to show that this hypothesis also fits with regard to its contents.

Chp. II

In this Chp., the paper investigates the doctrine teached in *Av*. It has been probably guessed that, *Av* which includes sixteen suttas in an existing collection was complete already at a very early time. If that is the case, it is not always easy to discover a relevance among the contents of sixteen suttas. It must be, however, realized that each suttas of *Av* throw the main emphasis upon a criticism to offer against other thoughts such as brahmanic religions and heretics. For the sake of illustration, let us quote the following instance.

Diṭṭhi, the Pāli technical term which means religious opinion, is

A Tradition of the *Aṭṭhaka-vagga* in the Age of Primitive Buddhism

Kiyotaka Minami

SUMMARY

The *Aṭṭhaka-vagga* (=*Av*) makes an entry as being one of the five chapters of *Sutta-nipāta* (=*Sn*) in our present sets of Pāli Sutta-piṭaka. Whereas *Av* appears to have been independent collection long before the existence of a separate work called *Sn*. This paper aims at giving the explanation of some problems relating to *Av* as independent one.

Chp. I

Av is mentioned in many Buddhist works. Japanese and foreign scholars already have pointed out many passages in them. The most well-known one especially among them is the episode of Soṇa Koti-kaṇṇa, which is described in various texts in the later times. In Pāli *Vin* of the earlist model, Bhikkhu Soṇa enlighted by Mahā-Kaccāna called on Buddha who dwelled in Jetavana and he recited *Av* before the presence of Buddha. This incident is also quoted in Pāli Nikayas and their commentaries, moreover is handed down to almost all Vinayas of other sects.

The *Saṃyutta-Nikāya* and its chinese versions have a episode that Hāliddikāni, who was not a monk, asked Mahā-Kaccāna about meaning of the verse of *Av*. And the other examples of recitation of *Av*